



大浜村旗頭本は、大浜村の桃原致知が1903（明治36）年に「上の村」と「下の村」に、それぞれ「萬壽旗頭」「ヤクムソノ花旗頭」を制作して寄附した際の寄附証と彩色された図面からなる。

「萬壽旗頭」はパパイヤ、「ヤクムソノ花旗頭」はメハジキ（漢方名で益母草）をデザインしたものと思われる。他に2点の旗頭の図面があり、1点は1904（明治37）年の日露戦争旅順口での大勝利を記念して制作された旗頭で、桃原致良と寄留人・東恩納盛珍の連名で大浜村に寄附したものである。他の1点は図面のみで、説明などは記されていない。

図面の作者は、明治中期に沖縄本島から沖縄芝居の巡業で来島し、そのまま宮良村に定住した久場島清輝（1866～1920）とされる。久場島は画家・芸家として活躍した人物で、「弥勒と唐子図」「琉装旅女の図」「大浜村龜幕の仏画」などの作品が現存している。

市指定



米為御嶽は、八重山にはじめて稲作を伝えたと言われる兄タルファイ、妹マルファイのうちマルファイの墓とされ、のちの人々が稲作を伝えた神として尊崇し、御嶽として信仰されるようになったといわれる。祭神はマルファイ神である。

御嶽とは人々の健康や地域の繁栄などを祈願する聖地のことで、米為御嶽は字登野城の御嶽として信仰されている。また、タルファイの墓も同様に尊崇され、大石垣御嶽として字大川の人々に信仰されている。

伝承によれば、タルファイ、マルファイは安南（現在のベトナム）のアレシンという所から稲種子を持っ

て来島し、登野城のくぼんとうぼる小波本原に家建て、水田を開いて島民に稲作を指導したとされる。

登野城の種子取祭や豊年祭などの農耕儀礼は、この御嶽と兄妹の住居跡とされるくぼんとうおん小波本御嶽を中心に、現在でも古式豊かに執り行われている。